

# 「新しい人」としての認知症

## —「高齢者心理」を学ぶ大学生の感想から—

久保田 美 法\*

### 1 「おばあちゃんは宇宙人」？

うちのおばあちゃんは あかちゃんみたい。

いつもねどこに ねています。

おむつを しています。

ごはんも ひとりでは たべられない。

でも あかちゃんとは ちがって おなかがすいても なきません。

ごはんは まだかい と おおきなこえで いいます。

いま たべたばかりじゃない と おかあさんは おこります。

おかあさんが おばあちゃんにおこると おとうさんが おかあさんに おこります。

おばあちゃんは おとうさんの おかあさんです。

むかしは びじんだった。

こどものころ おとうさんは おばあちゃんのかえるのが おそいと しくしくないて いたそうです。

ときどき おばあちゃんは おとうさんにむかって あなたはどなたでしたっけ

なんて きいたりします。

ときどき おばあちゃんは おかあさんのことを だろぼう! と いいます。

おかあさんは ひとりで ないていることがある。

ぼくが おばあちゃんなんか しんじゃえばいい と いうと おかあさんは

じいっと したをむいて だまっています。

一見、小学生の男の子が書いた作文のようにもみえるが、これは詩人の谷川俊太郎がイラストレーターの大輪滋と合作した絵本「シリーズ・ちいさなつぶやき」の内の一冊『おば

---

\*総合福祉学部 専任講師

あちゃん』(1981)の冒頭の文章である。老い、離婚、戦争、孤独など、絵本らしからぬ題材に取り組んだこのシリーズは、出版当時、賛否両論があがり、大きな論議を呼んだというが、今読んでも、その鮮烈さは色褪せていない。

「ぼく」は、認知症と思われる「おばあちゃん」について、見たまま聞いたまを率直に、時にシビアに語っている。これらは私たちが認知症高齢者に対してしばしば抱くイメージの一端をリアルに捉えたものとも思われる。と同時に、「ぼく」は、その祖母が「昔は美人だった」こと、幼い頃の父親がその祖母を慕って泣いていたことなども、変わらぬ口調で綴っている。また、泣いている母親に思いを寄せながらも、ぶっきらぼうな語り口の「ぼく」は、どこか一定の距離を置いて、この状況全体をじっと眺めているようにも思われる。この「ぼく」のまなざしの先には、一体何があるのだろうか。絵本の最後はこのように結ばれる。

ぼくは もしかすると おばあちゃんは うちゅうじんに なったんじゃないかと  
おもいます。  
うちゅうじんといっしょに くらすのは むずかしい。  
うちゅうじんは にんげんそっくりでも にんげんとは どこかちがうから。  
でも うちゅうじんも いきものです。  
せんせいは いきものを ころすのは よくないと いった。  
おとうさんや おかあさんも としをとると うちゅうじんに なります。  
ぼくも いまに うちゅうじんに なります。

「子どもが抱く高齢者のイメージ」を考察した金田(2006)は、この絵本では、「老いは人間を宇宙人にしてしまうという理解」がなされていると述べ、子どもをそうした理解のまま大人にさせないプログラムの開発が必要であるとしている。しかしこの絵本の「宇宙人」は、そこまで否定的な意味合いのものだろうか。

## 2 認知症の人は「ふつう」の人

もちろん「認知症＝何もわからなくなる人」では決してない。認知症になろうと、様々な感情があり、またその病ゆえの不安や苦悩もあることは、近年、認知症者自身の口から語られるようになった。若年認知症ではあるが、クリスティーン・ボーデン(2003)の著作はその先駆けであり、日本でも、呆け老人をかかえる家族の会(現・認知症の人と家族の会)編(2005)、水木(2007)、佐藤(2014)等、当事者の声を綴った著作が出版されている。

「認知症の人と家族の会」代表の高見(2015)は、その活動をふりかえり、80年代は認知

症の人が一生懸命生きているとは考えず、「困ったもんや」と思っていたのが、家族の会で交流を重ねる中で、認知症の人も必ずしも何もわからないわけではないことが見えてきて、1997年には「ぼけても心は生きている」が会のスローガンとなり、2004年の国際会議（国際アルツハイマー病協会第20回国際会議・京都）でそれが決定的になったと語っている。この家族会では、家族の思いと家族が触れた認知症の人の心を綴った本『痴呆の人の思い、家族の思い』（2004）も出版され、現在全国各地に支部ができ、活動を展開している。

とはいえ、認知症を肯定する視点からものを考えるメディアはいまだほとんどない（上田、2015）。精神科医の上田（2015）は、認知症の「対策」や「予防策」を考えるという姿勢は、介護者視点であまりに一面的であると指摘し、大変な問題だという否定的な見方を基礎にしたまま、認知症理解の啓発や勉強が行われても、偏見やスティグマを助長するばかりであると述べている。また、認知症の年代別人口が85～89歳では40%、90～94歳では60%を超える（2012年、厚生労働省研究班調べ）現状においては、認知症は長寿に伴う「ふつうの現象」であり、認知症の人の存在と心情を尊重し、「ふつう」の人として、いかに社会が迎えられるかこそ問われるべきである、と明言している。

### 3 「うちゅうじん」に込められたもの

さて、筆者が担当する「高齢者心理学」の授業において、「ただそこにいることで～詩人・谷川俊太郎 老いを見つめて」（2003年12月20日放送、NHK教育）を視聴し、その中で先の絵本『おばあちゃん』が紹介された際、学生の感想にこのようなものがあった（以下、学生の感想は楷書体で記す）。

「うちゅうじん、か。これは異質であるという意味だろうか。理解しがたい部分を持つ、ある種のやや外れた存在であるということか。」

「未知の存在だという風に言いたかったのではなく、少し自分とは違っていても、興味の対象になり得る存在だと言いたかったのではないか。」

「うちゅうじんという喩えが偏見に満ちた言葉ではなく、どちらかといえば高等なように思えた。」

「おばあちゃんをうちゅうじんにたとえているのは、妙なフィット感があった。『うちゅうじんになる』＝ちがう人になるということで、新しい人（生きもの）として認識し、新しいかかわり合いをしようという意味が込められていると思う。認知症の人とかかわることの大変さが書かれているはずなのに、マイナスな感情を私はあまり感じとれなかった。」

「大変さが書かれているはずなのに、マイナスな感情をあまり感じとれなかった」とは不思議なことである。頭で考えるとマイナスに感じてもおかしくないが、感覚としてはそう

いった感じがしないということだろうか。「あまり感じとれなかった」という言い方、あるいは「興味の対象になり得る」や「どちらかといえば高等なよう」も、どこかごちない表現である。しかし、「マイナスな感情をあまり感じとれなかった」というその感覚は確かなものとしてあり、そのことを自分でも何か不思議に感じている様子がうかがわれる。

この絵本の制作背景には、谷川自身の介護体験があったと言う。仲のよかった母親が認知症になり変貌していく姿を受けとめきれず苦しんだという谷川は、当時をふりかえって、「こんな人間じゃないと言いたい面もあるけれど、それにしても人間らしいところが残りすぎていて」と語り、「うちゅうじん」という表現は、当時としては「ギリギリの線」であり、「今ならもっといい言い方が出来るかもしれない」とも述べている。学生たちは、「ぼく」の視点をたどりながら、谷川のこの「ギリギリの線」に込められた何かを感じとっていたのかもしれない。

#### 4 大学生の認知症高齢者イメージ

「高齢者イメージ」を問う研究は、わが国では1980年代以降、東京都老人総合研究所を中心として、主にSemantic Differential法を援用した調査が数多く実施されてきた(南, 2004)。その対象は多岐にわたるが、大学生に対しては近年、特に看護系、介護系の学生に調査したものが多く、高齢者との交流経験によってイメージに差異があること、また認知症高齢者のイメージは高齢者一般のイメージと比較して否定的な傾向があるが、実習などのかかわりの前後で、そのイメージが肯定的なものへ変わったという結果を示す研究等がみられる(奥村・久世, 2008, 奥村・久世, 2009)。

講義科目ではあるが「(高齢者や認知症高齢者の)イメージが変わった」という声は筆者が担当している「高齢者心理学」でも散見されるが、その一方「でもこれはドラマだからなのではないか」「いざ身内で接するとなると、あのように優しくすることはできない」等の感想も聞かれた。筆者の授業では、各回のテーマに沿っていくつかの視点を紹介するとともに、ドラマや事例を通して、学生各自が高齢者の心に思いを馳せ、理解を深めることを目指している。“どのように理解すべきか”という言い方や、“優しく接すべき”といった伝え方はしていないつもりであり、また、それほどご都合主義なドラマを用いてはいないつもりではある。が、上記のような感想には、身近で介護場面に接してきた様子や、思わず声をあげたくなるような胸の内がうかがわれ、見過ごすことはできない言葉と思われた。

認知症は私たちに様々な感情を呼び起こす。自身のそうした感情を全く無視して、高齢者を「理解」しようとすることや、「優しく」することは難しいだろう。こうしたことを考える時、先の「マイナスにあまり感じなかった」という地点は、「べき論」ではなく、しかし、確かに感じられる、認知症高齢者との「新しい」リアルな接点の一つを示唆しているとも考

えられる。

先の絵本から当の「おばあちゃん」の気持ちをうかがうのは難しい。しかし、この「おばあちゃん」に接するなかで、「ぼく」には何かもたらされているようにも思われる。それは何だろうか。「おばあちゃん」の気持ちを理解しようとするのは大切だが、まず、「おばあちゃん」に接する側の思いや体験をふりかえることにも、一つの意義があるのではないか。

この絵本について、「大人になって言にくいこと、見たくないことを素直に書かれていて良いと思った」との感想もあったが、大学生は確かに、もはや「子ども」ではなく「大人」である。しかし、高齢者に対しては未だ「孫」世代に属し、目下、介護の主な担い手になっていることは少ない。そうした大学生にとって、認知症高齢者の在り様はどのように映り、そこから彼らは何を受けとるのだろうか。谷川の「うちゅうじん」を、先の学生は「新しい人として認識」し、「新しいかわり合いをしようという意味」と読み取っていたが、それは、どういうことを指すのだろうか。本稿ではこれらを、筆者が担当する「高齢者心理学」の感想から考えてみたい。なお、筆者は昨年度、本紀要で「大学生が『高齢者心理』を学ぶことの意義」について考察した（久保田、2015）が、本稿はその“認知症編”でもある<sup>1)</sup>。

## 5 「届かないって辛い」と「幸せの垣間見」

そもそも認知症に「マイナスな感情」が抱かれることが多いのはなぜだろう。授業で「認知症の人の思い、家族の思い」をテーマとした回に、このような感想があった。

「ちょうど今日、私の親が認知症になってしまった夢を見た。親と私は互いにパソコンをしていて、親が突然『あなた誰』と言った。夢の中の私は『とうとう来てしまったか』という感情を持ちつつ親に対して普通に対応していると、親はまた私の名前を話せるようになっていた。夢の中でさえ、私自身が感じるダメージが多かったが、ふとした時に以前までの親の姿を感じると、とても安心した。現実場面なら、より嬉しく感じるのではないか。」

この学生がなぜこのような夢を見たのかは分からない。「とうとう」と言われているように、“親が認知症になったら……”という不安をふだんからどこかで抱えていたり、潜在的にそうした想いがあったのか。学生にとって、認知症は案外身近で切実なことでもあるのだろうか。いずれにしろ、親から「あなた誰」と言われた時の「ダメージ」や、以前の親の姿に戻った時の安堵が体感としてあったことがうかがわれる。“親が自分のことを分からなくなる”という何ともいえない思いと、いつも通りに通じ合った時の嬉しさは、表裏のようでもあった。

また、『折り梅』(松井久子監督, 2001年)という、実話に基づいた、認知症の人の思いと家族の思いが細やかに描かれた映画を観た時には、それぞれの立場に思いを寄せた様々な感想が出たが、その中に以下のようなものがあった。

「家族の想いとして、認知症の人の世話をしているけど、認知症の人は何を言っても通じないし、ムダだと思っている部分が垣間見えた。それは、こちらがいくら気にかけても、それに対するフィードバックがなく、意思疎通ができないからであると感じた。このことから、家族も先のみえない不安や孤独感に襲われているのかなと感じた。また、その人が認知症になる前のしつかりとした部分をみてきたからこそ、戸惑いや悲しみといった感情が表れて、複雑な心境になるのかなと感じた。」

そうした中、主人公である嫁の巴は、様々に葛藤しながら、次第に義母の政子がアルツハイマーの症状に人知れず悩んできたことに気づき、また政子の幼い頃からの苦労や、夫を早く亡くして女一人で子どもを育てあげてきた誇りを知る事となる。そんな巴に対し、政子の方も、悪いと思いつつ当たることが出来るのは巴だけだった、と吐露する。そうした場面をみて、ある学生は、

「認知症の人にも尽くしていることは届くのだと知れたことが自分の中では本当に嬉しいことだった。届かないって辛いと思うのです、お互いにとって。」

と述べた。その「辛さ」と「嬉しさ」に、学生の思いがほのみえるようである。

自分の思いが相手に通じない辛さや、相手の思いが理解できない苦しさは、何も認知症に限らない。けれど認知症の通じなさは、通じるのが当然であったことが通じなくなる戸惑いにあり、当たり前が揺さぶられることにあるようにも思われる。

またある学生は、認知症の夫が亡くなる間に妻にかけた一言(「痴呆の人の思い、家族の思い」2004所収)について、次のような感想を述べた。

「(授業で)一番印象に乗っているのは、『あとは大丈夫か』。このくだりにとても強く感銘を受けた。言葉はなくても通じ合える何かを築きあげた二人の絆がとても強固で深いものだと感じた。一方通行だと思って話していたことも、実はちゃんと聞いていた。旦那さんのその言葉だけで奥さんはきっと旦那さんの思いを理解したんだと思う。だてに何十年連れ添っていない。その幸せの形を垣間見れたことがすごく良かった。」

さらに、家族の辛さを「フィードバックがない」ことと捉えた先の学生は、こんな気づきも書いている。

「認知症の人から何らかのフィードバックがあったとき、認知症の人の不安や家族の不安といったものが初めて理解でき、お互いの不安を払拭しあっているのではないかと感じた。このフィードバックは中々気づきにくかったり、全くない場合もあって、自分も『折り梅』でみたような状況になったときに優しく接することは難しいと思っていた。しかしフィードバックがなくても、認知症の人の根っこにある部分は残ったままで、自分のしたことは届いているという意識の変化を自分が試みることで、相手にもそれが伝わっていくのだと学ぶことができた。」

一見、“届いていないようで、届いている”と意識の変革を試みる時に、伝わっていくこと、伝わってくる。それは、通常のコミュニケーションで「伝わる」こととは、少し次元が変わることを示唆してはいないだろうか。

## 6 「“ぼける意味” が生まれる」

“根っこは残ったまま”であることへの信頼をもって、認知症高齢者同士の交流に目を向けると、いわゆる「偽会話」もまた、違ったものにみえてくる。「偽会話」とは、認知症高齢者同士の間で、一見会話をしているようで、言葉の内容としては噛み合っていないものを指す。しかしそれは果たして「偽」であるのか。小澤（2003）はこれを「理と言葉の世界を超えた直接的な交わり」であり、「ひととひととの関係性が原初的な姿で、いっさいの虚飾を脱ぎ捨ててそこにある」と指摘している。小澤（2003）が挙げている「偽会話」の例や、ある「宅老所」でみられた「偽会話」の場面（村瀬，2011）を紹介した回には、以下のような感想があった。

「会話が噛み合っていることではなく、お互いが今の気持ちをそのまま言葉にしているところがとても印象的だった。その会話の意味は、その二人にしか分からないのかもしれない…でもそれを見ていて嫌な気分には全くならなかった。」

ここでも「嫌な気分にならなかった」という少し不思議な表現がみられた。またこんな連想をした学生もいた。

「私としては正常である今の母の方が意見のズレや問題に対する話し合いの向き合い方に困ってしまう。正常であるからこそ、なかなか許し難いものであると思う。」

そもそも「正常」とは何か、「コミュニケーション」とは何なのか。「偽会話」は、そのことをあらためて考えさせてもくれる。

「この会話(「偽会話」)のどこにも否定するような言葉は全くない。このことが一つのカギになっているのかなと思った。」

「二人の会話は、もうしなくていいというか、ないことなのに、一生懸命会話し、今を生きているような印象を受けた。」

会話をする事、そのこと自体へのコミットは、人が生きるということ、そのものでもあるのだろうか。

「私は偽会話をよく犬としている。犬が鳴いている時に返事をして、意味は分かってないけど、やり取りとしては成立している。」

「認知症ではない大学生でも案外話がかみ合っていない。バスの中での会話などを聞いているとそう思う。そういう時に話すのは会話内容ではなく、会話をしている、会話の雰囲気を楽しんでいるだけなのだと思っている。」

こう考えると、「偽会話」は何も特別なことではないようにも思われてくる。

また、認知症高齢者同士の「仮の関係」(阿保, 2010) について紹介した時には、こんな感想もあった。「仮の関係」とは、施設で認知症高齢者が見ず知らずの入居者と“夫婦”や“親子”であるかのような関係をもつことを指し、しかし、フィクションでありながらも、認知症の人たち自身が、その関係がフィクションであることをどこかで承知していると思われることからこの名称をつけたと阿保(2010)は述べている。

「ハナさんとヨシさんの関わりは興味深い。現実世界では接点のない二人が、親子関係を築いているように見える。ヨシさんが窮地になるとハナさんがどこからともなく救いに来るのは、子を救いに来る母のようである。ここには生きてきた証によって創られた『世界』があるように感じる。この『世界』を『ぼけてるのね』という一言で終わらせてしまうのはもったいないのではないだろうか。その『世界』によって、認知症の方の活力が保たれたり、人生を振り返ることもできるかもしれない。このことこそが『ぼける意味』なのではないだろうか。そう考えると、その『世界』に我々がお邪魔させてもらうこともいいことのように思える。たとえ妄想による世界であっても、我々の関わり方で『ぼける意味』が生まれると感じた。」



「お邪魔させてもらう」という言葉が口をついて出る時、その「意味」は、ハナさんやヨシさんにとってのみならず、この学生にとっても——間接的にはあるが——「生まれ」ているのではないだろうか。

## 7 「人生の次のステップ」

「ぼける意味」については、さらにこんな感想もあった。

「ぼけることは“自由になる”ことでもあるのだろうか。実際には“そうではない”ことなのだけれども、当人にとっては“本当のこと”である世界は、ある種の現実という枠組みから解放された、死の間近になって許される“自由のとき”であるのかもしれない。」

この「死の間近」とはいわゆる瀕死の状態のことではなく、長い人生を経ての老年期を指しているものと思われる。この学生はさらに、授業で観た映画『ナビィの恋』（中江裕二監督、1999年）も想起し、初恋の人を胸に抱き続けた主人公のナビィがその男性と再会し、二人で旅立つのを黙って見送る夫の姿に「死の間近の自由を尊重する姿勢」をみている。ナビィは認知症ではないがと断りつつ、こうした老年期に特有の「自由」を、認知症であるかにかかわらず見出している点は興味深い。

このように、時には目の前の人や状況に「自分の生きた証」を映して、それを生ききるという「自由」もあれば、かけがえのない過去を脱ぎ捨て、新しい生へと解放たれていく「自由」もある。別のある学生には、こんな感想もあった。

『『若かりし頃の記憶』を忘れることによって、次のステップへ進むことも、人生の昇華のひとつなのではないか。『ナビィの恋』のナビィとサンラー（初恋の男性）は過去を共有し、ナビィとおじい（ナビィの夫）は月日を共有し、そして自らの人生をそれぞれ昇華させていた。『折り梅』の政子は、息子の嫁（つまり身近な人）へ、幼い頃の母の姿を重ねることによって、過去の空白を埋めていく姿が印象的だった。宅老所のキヌさんと健治さんは、あいまいな会話を交わし、ただ寄り添うことで、人生の次のステップへ進んでいる姿がなんとも愛らしく、幸せな雰囲気につつまれていた。』

「ぼけるという事は、長い人生で培ってきたものをすべて投げ捨て、“自分” というものをまるごと受けとめてもらうという意味があると感じる。」

「過去でも未来でもなく、今をまっすぐ見つめられるのはすごいと思う。ジタバタ動くのではなく、流される勇気を感じた。」

『『高齢者』と聞くと『弱者』というイメージがとても強かったが、『弱者』ということだけでは『高齢者』という存在を説明することができないと思った。『弱者』なんだけれども、その先にあるものがあるということを学ぶことができてよかった。』

人生の「その先」には、こんな姿や世界もありうるのかという発見。自分ではまだ想像もつかず、今なりうるものでも、それを望むものでもないかもしれないが、こうした「自由」の存在を知ることによって、何か広やかな気分になっているようにも思われる。

## 8 「存在でわかりあう」

さて、冒頭に挙げた絵本『おばあちゃん』から20数年後、谷川は自身の老後を考えて様々な施設を廻り、福岡にある「宅老所よりあい」と出会った経験から、「ただそこにいることで」という詩を書いた。

「ただそこにいるというのは、言葉でなく存在でわかりあえていることだと思う。絵本『おばあちゃん』の子どもの視点からしたら、おばあちゃんのことを理解してあげていないが、でも誰でも最後は『うちゅうじん』になるといつていた。何故おばあちゃんがこうなっているかは分からないのに、誰でも最後はこうなっていくものなんだといった終わり方をしていた。ここからも、言葉で理解がなくても日常的に存在していて、存在として理解しているのではないかと思う。そして、ただそこにいるというのだから、沈黙を恐れずただそこにいることが大切なことだと思う。そこにいることで、雰囲気から感じとれるものは沢山あり、高齢者に応えていける。その時間が積み重なれば重なっただけ、お互いの関係を築いていけると思った。」

関係を築くのに、「理解」は必ずしも必要ではない。そのことがごく自然に感じられる時、肩の力を抜いて、“ただそこにいる”世界がひらかれるのだろう。

また谷川俊太郎が同時期に書いた「わらいのわけは たずねることが できる だが ほほえみのわけは たずねることは できない」という詩(2001)を紹介すると、次のような感想があった。

「『ほほえみのわけをたずねることはできない』というのは私なりに何となく分かるような気がした。笑っているところにはフランクに話しかけたり入っていったりしやすい気もするけど、ほほえみって深いわけがある気がするような……。なにか悲しいことがあって、でもよかった部分もあって、その時にはほえんでいた、一人で思いにふけていたいのかもしれないから静かにほえんでいたりと、とにかくわけが深い気がするから、たずねることはできないと思うのかな……と。」

分からないものを分からないままに、ふだんのフランクな関係とは少し違う何かを感じとり、一定の距離を置きつつも、そっとそこにとどまるという感性。そのように感じて佇む時、その距離感は、両者にとって何か心地よいものであるようにも思われる。

## 9 「淋しいけどステキ」「ステキだけど淋しい」

映画『折り梅』のラストシーンでは、認知症が進んだ政子と嫁である巴の静かな日常が映し出される。そこで政子は旧姓を名乗り、生まれ故郷に帰ると語るが、巴はそれをそのまま受けとめ、通りがかりの人のようなふるまいで、お茶に誘う。このシーンについて、ある学生は次のように述べた。

「認知症になった方も、どこはかたなく気づいているのかもしれないけれど、今までの関係からまた違う関係になるって、介護している側からしたら、少し淋しいような気もするけれど、楽しめるような気もして、なんだかうまくいえないけど、ステキに思えた。」

一方、認知症の母親との日々を漫画に描いた岡野（2012）が、認知症者の生きる世界を“nowhereはnow + here”と解いてみせ、それに応じて作家の田口ランディが、ある認知症者が桜を見て、まるで生まれて初めてであるかのように感動していたというエピソードを語った話（「みつえとゆういち～親子で紡ぐ“認知症”漫画」2012年11月29日放送，NHK教育）を聞いて、こんな言葉をもらった学生もいた。

「何回も『生まれて初めて』が存在するというのはステキに思えると同時に、淋しいことだと感じた。」

「淋しいけどステキ」「ステキだけど淋しい」。期せずして相反するかにみえる二つの感想が出た。これまでの経験の積み重ねから解き放たれ、「次のステップ」に進む高齢者の傍にいる時、かかわる側も未知の世界へ誘われる。それを「ステキ」と感じるのは、「嫌な気分になくならなかった」という感触の「先」にあるものかもしれない。

一方、「ただそこにいることで」、どれほど「今この時」を共にしていても、自分の祖父母や両親が、どこか見知らぬ人になっていく。その「淋しさ」は完全に消えてなくなるものではないだろう。「淋しさ」だけではない、新たな世界もあることを知ることは貴重であり、時に救いにもなるかと思われる。が、人としてこの世に生きる限り、「淋しさ」が残るのもまた事実であろう。その両面をしっかりと捉え感じるからこそ、認知症高齢者とのかかわりでは重要なかもしれない。

そしてこれは、様相は異なれ、認知症である高齢者が感じていることとも通じているのではないだろうか。認知症高齢者もまた、時に客観的現実を離れた「生きてきた証」の世界に遊びつつ、どこかで淋しさも感じておられるように思われる。

## 10 もう一つの「ふつう」

谷川 (1981) の「おばあちゃんはうちゅうじん」に対する感想を出発点として、認知症高齢者の在り様に触れる時、学生はそれをどのように感じ、何を受けとるのかを、学生の言葉からみてきた。

「私たちは結局、一人一人の人間であって、ある意味、自分以外の人は全員宇宙人のようでもあるのではないか。しかし、様々な宇宙人とふれあうことで、その人の持っている世界観を理解したり、自分の世界観と共有することができる。」

確かに広く捉えるなら、認知症の有無に限らず、「自分以外の人は全員宇宙人」でもある。「ぼく」が一貫して淡々とした口ぶりで、最後に「ぼくも いまに うちゅうじんになる」と述べていたのも、そのように透徹したまなざしがあったからこそとも考えられる。

とはいえ私たちは、ある程度共通の価値観をもっているから、この社会は成り立っているという面もある。「マイナスな感情をあまり感じなかった」というごちない感想は、そのように普段自分たちが依拠している価値体系にうまく組み込めないものとして「おばあちゃん」が描かれていたことによったとも考えられる。それは「プラス」とも「マイナス」とも言えず、容易に名づけることもできない。が、そこに何かがある、ということを感じていた。

時に「淋しい」と感じ、時に「ステキ」と感じて、青年期を生きる学生たちにとって、それらがすぐに何の役に立つかと言えば、難しいであろう。しかし、そうした未知の世界に触れて、自分たちと通い合うものや、何かしらの意味を感じ、自然に受けとめていたように思われる。

家族会のスローガンにあったように、「ぼけても心は生きている」という点で、認知症高齢者も「ふつう」の人である。と同時に、私たちが当たり前のように生きている日常のすぐ隣に、「理解すること」はできなくても、「ただそこにいること」はできる不思議な世界が広がっている。そうした世界があることもまた「ふつう」のことなのではないだろうか。そのように捉えることの意義を、学生たちの感想は示唆していたようにも思われる<sup>2)</sup>。

## 注

- 1) 前稿(久保田, 2015)と同様, ここでとりあげる学生の感想は, 毎回授業の終わりに提出するリアクションペーパーと期末試験の答案で書かれたものである。これらを論文に掲載することについては, 授業と期末試験を終了し, 成績評価を終えた後, 掲示で研究趣旨の説明とその許可を依頼し, 一定期間内に筆者に連絡があった者の感想については掲載しないこと, またその期間内に特に申し出がなかった者については了解を得たこととする旨を伝えた。
- 2) 認知症高齢者の不思議な有り様を「ふつう」と受けとめること自体は, 何も新しいことではない。新村(2002)によれば, 江戸時代の人々は認知症高齢者を神の自由な世界に一步近づいたものと考え, 大切に接していた。また河合(1991)によれば, アイヌの人たちは, 認知症高齢者の言うことが一般の人間にだんだんとわかりにくくなるのは, 「神用語」を話すようになったからと考えたと言ふ。しかし, 冒頭で示したように, 認知症を肯定するメディアがほとんどない現代(上田, 2015)において, 学生自らが, 新たにこのように感じとる姿を示した点は, 本稿の一つの意義かと思われる。

## 文 献

- 阿保順子(2010) 認知症老人の生活世界, 阿保順子・池田光穂・西川勝・西村ユミ編, 認知症ケアの創造 その人らしさの看護へ, 雲母書房, pp.28-49.
- 呆け老人をかかえる家族の会編(2004) 痴呆の人の思い, 家族の思い, 中央法規.
- 呆け老人をかかえる家族の会編(2005) 若年期認知症 本人の思いとは何か—松本照道・恭子夫妻の場合, クリエイツかもがわ.
- 金田千賀子(2006) 子どもが抱く高齢者のイメージ, 医療福祉研究第2号, pp.1-10.
- 河合隼雄(1991) 老いのみち, 読売新聞社.
- クリスティーン・ボーデン(2003) 私は誰になっていくの? アルツハイマー病者からみた世界, 檜垣陽子訳, クリエイツかもがわ.
- 久保田美法(2015) 老いへの関心は生きることへの関心—「高齢者心理」を大学生が学ぶことの意味—淑徳大学研究紀要(総合福祉学部・コミュニティ政策学部)第49号, pp.47-62.
- 南彩子(2004) 高齢者イメージについて考える—「元気・自立カテゴリー」を問い直す—, 天理大学社会福祉学研究室紀要(6), pp.5-14.
- 水木理(2007) ブログ「認知症一期一会」—認知症本人からの発信, クリエイツかもがわ.
- 村瀬孝生(2011) 看取りケアの作法(宅老所よりあいの仕事), 雲母書房.
- 佐藤雅彦(2014) 認知症になった私が伝えたいこと, 大月書店.
- 谷川俊太郎・三輪滋(1981) おばあちゃん, ばるん舎.
- 谷川俊太郎(2001) ほほえみのわけ, 山中康裕編, 魂と心の知の探求—心理臨床と精神医学の間, 創元社.
- 岡野雄一(2012) ベコロスの母に会いに行く, 西日本新聞社.
- 奥村由美子・久世淳子(2008) 高齢者のイメージに関する文献研究—一般高齢者と認知症 高齢者に対するイメージ—, 日本福祉大学健康科学論集第11巻, pp.57-64.
- 奥村由美子・久世淳子(2009) 大学生の高齢者イメージに関する要因—認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較—日本福祉大学健康科学論集第12巻, pp.31-38.
- 小澤勲(2003) 痴呆を生きるということ, 岩波新書.
- 新村拓(2002) 痴呆老人の歴史, 法政大学出版局.
- 高見国生・天田城介(2015) 認知症の時代の家族の会, 現代思想「認知症新時代」, Vol. 43-6, pp.74-95.
- 上田諭(2015) 認知症をすすんで迎える社会に—否定的な視点を変える, ころの科学 Special Issue 2015認知症によりそう 「治す」から「あるがまま」へ, 日本評論社, pp.2-5.

## The Dementia Elderly as “New Beings”:

From the Impressions of University Students Studying the Psychology of Aging

KUBOTA, Miho

The purpose of this paper is to consider how university students feel about the dementia elderly, and what they can learn from those people. Because behavior of those with dementia is often beyond our comprehension, students tend to have negative images toward such elderly people. However, by changing their viewpoint, students come to know different scenery, different people, who cannot help talking continuously, feeling coexistence with others and who live sincerely at all their best, sometimes indulging in their precious memories, sometimes existing in a brand-new-world. Led by those elderly people, students also venture into the unknown world. Although lonely feelings still lie, they can discover something new that could be, in fact, hidden in our daily life.